精霊達の一夜

一、迷い森

その森は、どこか空気の色が違っていた。

昼なお薄暗く、梢の隙間から差す陽の光はどこか青白く、まるで水底を歩いているかのような錯覚を誘う。鳥の声はなく、風の音さえも遠く、ただ湿った苔の匂いだけが濃密に漂っていた。

楠舞神夜は、そんな森の入り口に立っていた。

「……これは、困ったこと極まりないですね」

目的地である隣町を目指していたはずが、いつの間にか街道を外れ、気づけばこの異様な森の中に足を踏み入れていたのである。しかし神夜は、さして慌てる様子もなく、むしろ何かに引き寄せられるようにして奥へ奥へと進んでいた。

斬冠刀を杖代わりに歩を進めるたび、衣装の合わせ目からこぼれ出た爆乳がブルン、ブルンと頼りなげに揺れる。128cmの碩大な双丘は今日も下着に縛られることなく、ただ帯と布地の緩やかな支えだけでその質量を保持していた。ぷっくりと盛り上がった幅広の乳輪は衣装の縁から常にはみ出し、薄暗い森の中でさえ異様な甘やかさを放っている。逞しい乳首は森の冷気に触れてしこり、布地の上からでもわかるほどコリコリと尖っていた。

歩を進めること半刻ほどだろうか。

ふと、神夜は立ち止まった。

「……何か、いらっしゃいますね」

湿度の高い空気の中に、微かな光の粒が漂っているのに気づいたのである。蛍のようにも見えるが、よく目を凝らすと、それらは人型をしていた。

小さな、小さな人型の光。

身長は140cmほど。大人よりは小さく、しかし子供と呼ぶにはどこか落ち着いた佇まい。無数のそれらが、木々の合間を漂い、あるいは苔むした岩の上に座り、じっと神夜を見つめているようだった。

神夜はしばらくその光景を眺め、やがてすべてを理解したように小さく頷いた。

「……精霊様、でしょうか。それも、ずいぶんと沢山……ああ、あなた方は……」

かつてこの森で、無念の死を遂げた男たち。

戦であれ、病であれ、あるいは単なる道中の事故であれ、帰るべき場所に帰れず、この森で朽ちていった者たちの魂。彼らは成仏できぬまま精霊と化し、永い時を彷徨い続けていたのである。

よく見れば、その小さな光の姿はどれも痩せ細って見え、どこか哀しげな雰囲気を纏っている。神夜に敵意はなく、かといって助けを求める声もなく、ただただ所在なげに漂うだけの存在たちだった。

「……こんなに長い間、この暗い森の中でお独りだったのですね」

神夜はそっと目を伏せ、次いで顔を上げると、そのたおやかな微笑みを浮かべて彼らに向かって言った。

「楠舞家の姫、楠舞神夜と申します。よろしければ……私に、皆様の御霊を慰めさせていただけませんか」

そう言いながら、神夜は自らの衣装の帯に手をかけた。

シュル……と布の擦れる音が静寂の森に響く。

あっという間に、128cmの爆乳が完全に露わになった。衣服の下から現れた双丘は、青白い森の光の中でなお白く輝き、その表面には淡く青い血管が透けて見えるほど繊細な肌が貼りついている。幅広の乳輪は桜色に色づき、その中心では逞しい乳首がすでにツンと勃ち上がって存在を主張していた。

続いて腰布を解き、下半身をあらわにする。

ムダ毛の一本も生えていない無毛の秘所が、森の冷たい空気に晒された。ぷっくりと白い大陰唇は少女のように無垢でありながら、その内側はすでに仄かな熱を帯び、ほんのりと蜜を滲ませ始めている。パイパンの恥丘はつるりと滑らかで、その中央に刻まれたわりめが、これから訪れる悦びに期待してヒクヒクと疼いていた。

精霊たちの光が、一斉に神夜へと向けられた。

「さあ……どうぞ遠慮なく、私の身体をお使いくださいませ」

神夜はふわりと微笑み、苔むした地面に膝をつくと、両手を広げて彼らを招いた。

二、最初の一体

精霊たちはしばらく戸惑うように漂っていたが、やがてそのうちの一体が、おそるおそる神夜に近づいてきた。

最も小さな光。その精霊はかつて、若くして戦で命を落とした兵士の魂であった。家族のもとへ帰ることも、恋人に別れを告げることもできず、ただこの森で朽ちていった男。その魂は今、140cmほどの小さな人の形をして、神

夜の前に立っていた。

「いらっしゃいませ……♥」

神夜はそっと手を伸ばし、その小さな精霊の手を取った。

「あなた様は……ずいぶんとお若いまま、この世を去られたのですね。さぞや心残りも多いことでしょう」

精霊は何も語らない。しかしその光が、神夜の言葉に触れるたびにほんの少しだけ温かさを増しているように見えた。

「大丈夫です。今夜は私が、あなた様のすべてを受け止めます。どうぞ……あなた様の『おチンポ様』を、私にお見せくださいませ」

神夜がそう囁きかけると、精霊の下半身にぼうっと光が集まり、やがてそれは一本の男性器の形を成した。

精霊ゆえに質量を持たない、半透明のペニス。しかしそこには確かに熱があり、脈動があり、そして何よりも、長い間女性を知らぬまま永らえた若者の渇きが宿っていた。

「まあ……なんて愛らしいおチンポ様……♥」

神夜は両手で恭しくその陰茎を包み込んだ。掌に感じるのはほのかな温もりと、幽かな震え。それは紛れもなく、彼の魂そのものの震えだった。

「感謝感激、極まりないです……♥ あなた様のおチンポ様を、こうして直に触れさせていただけるなんて……ああ、皮の下でこんなに硬くなって……♥」

神夜はそう言いながら、ゆっくりと包皮を扱き、亀頭を露出させた。透明感のある亀頭はそれでも赤みを帯び、先端の尿道口からはとろりと精霊の蜜が滲み出している。

「んっ……♥ では、失礼して……」

ちゅっ……。

神夜は優しくその亀頭に唇を押し当てた。柔らかな唇で包み込み、先端にキスをするように、何度も何度も啄ばむ。

「ちゅっ……れろっ……♥ おチンポ様、あったかいです……♥ あなた様の魂の熱、私の唇に伝わってきます……♥」

舌を伸ばし、亀頭の裏筋を下から上へと舐め上げる。鈴口に舌先を差し込むと、不思議な甘さを含んだ蜜がじわりと広がった。それは精霊の涙だろうか、それとも長年の孤独が凝縮されたものだろうか。神夜にはそれが、どんな

男性の精よりも尊いものに感じられた。

「んっ……♥ もっと、もっとお慰めいたしますね……♥ んぶっ……ちゅぱっ……じゅるるるっ……♥」

神夜は口を大きく開け、その小さな陰茎を根元まで一気に咥え込んだ。小さな精霊のペニスは神夜の喉奥にすっぽりと収まり、彼女の頬の内側で脈打つ。

「んーっ……♥ んっ、んっ……♥♥」

頭を前後に振りながら、徹底的にその陰茎を扱く。舌全体で締め付け、口蓋で亀頭を擦り、喉奥で鈴口を締め上げる。神夜の口淫はもはや奉仕というより愛おしみそのものだった。相手が精霊であれ、人の子であれ、彼女にとっては「おチンポ様」に変わりはないのだ。

やがて、精霊の陰茎が口の中でさらに硬く、熱くなっていくのを感じた。

「ん……♥ イかれますか……？ どうぞ、お口の中に、遠慮なくお出しくださいませ……♥」

神夜が心の中でそう念じた瞬間。

ビュルッ……ビュルルルッ……！

精霊の精が、神夜の口内で迸った。量はさほど多くなく、質感は霞のように儚い。しかしそこには確かに、彼が生きた証と、成仏できぬまま溜め込んだ無念と、そして神夜への感謝が込められていた。

「んくっ……♥ ありがたく、頂戴いたします……♥」

神夜は一滴残らず飲み下し、そっとペニスから口を離した。

すると。

その精霊の身体が、みるみる明るく輝き始めた。半透明だった輪郭がはっきりとし、そして次の瞬間、彼はふわりと浮かび上がる。

光の粒子が、天へと吸い込まれるように昇っていく。

「……行かれるのですね♥ どうか、心安らかにお眠りくださいませ」

神夜が手を振ると、精霊は最後に一瞬だけ輝きを増し、そして消えた。

森に、ひと筋の温かな風が吹き抜けた。

三、群がる精霊たち

最初の一体が成仏したのを見て、他の精霊たちの様子が変わった。

それまでは遠巻きに眺めるだけだった無数の光たちが、一斉に神夜へと近づいてきたのである。数は数十体、あるいは百を超えているかもしれない。彼らの光が神夜の裸身を照らし、128cmの爆乳や無毛の秘所を青白く浮かび上がらせる。

「まあ……♥ 皆様、そんなにお急ぎにならなくても……♥ 今夜は逃げたりしませんから……♥」

神夜はクスリと笑い、より彼らを受け入れやすくするために、苔の上に仰向けになった。両脚を大きく広げ、秘所を完全に露出させる。ぷっくりとした大陰唇の奥では、すでに愛液が溢れ、無毛の恥丘をテラテラと濡らしていた。爆乳は重力に従って左右にだらりと広がり、その上で幅広の乳輪と逞しい乳首が、精霊たちの光に誘われるようにピンと立っている。

次の瞬間、精霊たちがいっせいに神夜に取りついた。

「ひゃあっ……♥♥」

まず、両方の乳房にそれぞれ一体ずつ、合計二体の精霊が吸い付いた。彼らの小さな口が、神夜の逞しい乳首に噛みつき、吸引する。乳輪ごと口に含まれ、舌で乳首の先端をチロチロと舐められると、神夜の身体はビクンと跳ねた。

「んあっ……♥ 乳首、そんなに吸われたら……ああっ、母乳はまだ出ませんけれど……それでも気持ちいい……♥ んっ、んんっ……♥」

さらに三体、四体と、精霊たちは神夜の身体に張り付く。太腿の内側を舐める者、臍の周りを舌でなぞる者、腋の下に顔を埋める者。彼らは思い思いに神夜の肉体を味わい、その温もりに縋った。

そして五体目の精霊が、ついに神夜の秘所に顔を近づけた。

「あ……♥ そちらも、お使いになりますか……？ どうぞ、私のおまんこ、あなた様に差し上げます……♥」

精霊はこくりと頷くように光を瞬かせ、その小さなペニスを神夜の秘裂に押し当てた。

ぬるり……。

とろとろに濡れそぼった秘所は、精霊の挿入をなんなく受け入れる。彼の小さな陰茎が神夜の膣壁を押し広げながら侵入してくると、彼女は甘やかな吐息を漏らした。

「んあぁぁ……♥ 入ってきました……あなた様のおチンポ様、私の中に……♥ ああ、ずいぶんとお熱い……長い

間、誰かに触れてほしかったのですね……♥」

精霊は無言のまま、神夜の膣内でピストンを始めた。規則正しく、しかし必死に、彼は神夜の中を掻き回す。

「んっ、んっ、んっ……♥ いいですよ、もっと激しく……♥ あなた様の無念、全部私のおまんこで受け止めますから……♥ んあっ、そこ、子宮の入り口をノックされて……♥♥」

膣内で精霊のペニスが動くたび、クチュ、グチュ、と濡れた音が森に響く。愛液が泡立ち、太腿を伝って苔を濡らしていく。その間にも他の精霊たちは神夜の乳首や耳や首筋を舐め続けており、彼女の身体は快楽の波に何度も押し寄せられていた。

「イかせて……ください……♥ あなた様もご一緒に……♥ んぁあっ……♥」

神夜が膣壁をきゅっと締めると、中の精霊のペニスがビクビクと震え始めた。

そして――

ビュルルルルッ……！

精霊の精が、神夜の膣の奥深くで放出された。それは確かに子宮の入り口を叩き、胎内に染み渡っていく感覚を伴っていた。

「んあああああっっ♥♥ おチンポ様の御神酒、おまんこの奥で……ありがたく頂戴いたしますっ……♥♥」

その瞬間、体内で射精した精霊が光を増し、ふわりと消えた。成仏したのである。

しかし神夜が余韻を味わう間もなく、次の精霊がすでに秘所の入り口に控えていた。

「あら……♥ 次はあなた様ですか。どうぞ、どうぞ……♥ んっ……♥」

ずぶり……。

二体目の精霊が挿入される。前の精の精がまだ膣内に残っているため、ぬかるみはいっそう深く、卑猥な水音が一層大きく響く。

「はぁあ……♥ 精霊様たちのおチンポ様、次から次へと……私のおまんこ、もうグチャグチャです……♥ でも、それでいいんです……それがいいんです……♥」

四、輪廻の宴

それからどれほどの時間が経っただろうか。

森の中では、時間の感覚そのものが曖昧になっていた。ただ確かなのは、神夜が延々と精霊たちを受け入れ続けているという事実だけである。

仰向けになった神夜の上では、今や三体の精霊が同時に彼女を味わっていた。一体は秘所にペニスを挿入し、パンパンと腰を打ちつけている。一体は神夜の口にペニスを咥えさせている。もう一体は爆乳の谷間にペニスを挟み込み、パイズリの快楽に耽っている。

「んぶっ……♥ じゅるっ……♥ んっ、んっ、んんーっ……♥♥」

口では絶え間なくペニスを扱き、秘所ではピストンを受け止め、乳房ではパイズリ奉仕をする。神夜の身体全体が、精霊たちのための祭壇と化していた。

奥で動いている精霊が射精し、成仏する。するとすぐに次の精霊が入ってくる。口の中でも同じことが起こり、乳房の谷間でも同じだ。一体が成仏すれば、次の一体が後を継ぐ。神夜はもう、自分が何回目の相手をしているのか、何度目の精を受け止めているのか、まったくわからなくなっていた。

「んぁ……♥ もう、何人目の方でしょう……？ ふふ、数えるのを忘れてしまいました……♥ でも、まだまだいらっしゃいますね……♥」

ふと顔を上げると、まだ数十体の精霊たちが順番を待っている。彼らの光は、最初に見た時よりもずっと温かく、希望に満ちているように見えた。

神夜は彼らに微笑みかけ、自ら四つん這いの姿勢になった。爆乳を重力に任せて垂らし、無毛の秘所を背後に向けて突き出す。尻肉を両手で割り開き、肛門までもあらわにした。

「後ろからもどうぞ……♥ おまんこだけでなく、お尻の穴もお使いくださいませ……♥ どちらの穴に射精していただいても構いませんから……♥」

その言葉に応えるように、一体の精霊が背後から神夜の秘所にペニスを挿入した。同時に、別の精霊が正面から神夜の口にペニスを差し入れる。

「んぶっ……♥ あっ、後ろからもイイ……♥ おまんこ、奥まで届いてます……♥ んっ、んっ、グチュグチュいってる……♥」

さらに別の精霊が、神夜の垂れた爆乳の乳首に吸い付く。また別の精霊が彼女の肛門に指を挿し入れ、狭い肉の輪をほぐし始めた。神夜の身体中が、精霊たちの光と熱と渇きで埋め尽くされていく。

「ああっ♥ 何もかも気持ちいい……♥ おチンポ様も、お指も、舌も……全部、全部、私をイかせてくれる……♥」

やがて、肛門にペニスが押し当てられる感触があった。

「んあっ……♥ お尻にも、おチンポ様が……♥ もちろんです、差し上げます……♥ 遠慮なさらず……んっ……♥♥」

ずぶずぶずぶ……。

アナルにペニスが侵入していく。膣とは違う、より切ない膨満感が神夜を襲い、彼女は声なく喘いだ。

「んあああ……♥ お尻、お尻裂けちゃいそう……でも気持ちいい……♥ おまんこともどっちもおチンポ様でいっぱいです……♥ 二穴同時なんて、興奮極まりないですぅ……♥♥」

膣とアナル、二つの穴を同時に犯されながら、口でもペニスを咥え、乳房でも乳首を吸われている。五感すべてが性に満たされ、神夜はもはや自分がどこまでが身体でどこからが快楽なのかもわからなくなっていた。

膣の中の精霊が射精し、アナルの中の精霊も射精し、口の中の精霊も射精する。三者が同時に成仏し、三つの光が一斉に天へと昇っていく。

「んああああっっ♥♥♥ みんな、みんな一緒に……ああ、お空に昇っていく……♥ 御霊が救われていく……♥ これこそ、これこそ私の悦び……感謝感激、極まりないですぅぅぅっっ♥♥♥」

神夜は絶頂しながら、成仏していく精霊たちを見送った。

五、最後の精霊

どれだけの精霊が成仏したのか、もう誰にもわからない。

ただ、気がつけば森の中の精霊たちは、残り一体となっていた。

その精霊は、他のどの精霊よりも光が弱く、輪郭も曖昧だった。この森で最も長い時間を彷徨っていた者。おそらく、何百年も前にこの森で命を落とした旅人の魂だろう。彼はもう、自分が誰だったのか、何のために旅をしていたのか、それすらも忘れてしまっているようだった。

「……あなた様が、最後のおひとりなのですね」

神夜は、よろよろと立ち上がった。何十回もの性交ですっかりクタクタのはずなのに、その顔には疲れよりも深い慈愛が浮かんでいる。腿を伝うのは自分と精霊たちの精の混ざったもので、無毛の秘所からはとろとろと白濁が溢れ出し、太腿を白く汚していた。爆乳には無数の愛撫の跡が残り、乳首はすっかり充血して真っ赤に熟れている。

それでも神夜は、最後の精霊の前に膝をついた。

「……お待たせいたしました。あなた様こそ、最も永くこの森で彷徨われていたのですね。さぞかしお寂しかったことでしょう。どんなに長い夜だったことでしょう」

神夜はそっと精霊を抱きしめた。128cmの爆乳が彼の小さな身体を包み込む。半透明の精霊は、確かにそこにあり、確かに温かく、そして確かに震えていた。

「大丈夫です。私はここにいます。あなた様の無念も、孤独も、すべて私が引き受けますから……」

神夜はそう言うと、仰向けに寝転がり、最後の精霊を自分の上に招いた。通常の対面座位の姿勢で、彼のペニスを自らの秘所へと導く。

「さあ……どうぞ♥ 最後のおチンポ様を、私の一番奥に……子宮の一番深いところに、くださいませ……♥」

精霊のペニスが、トロトロになった膣内へと沈み込んでいく。何十回も使われた秘所はそれでもまだ固く締まり、精霊の陰茎を優しく包み込んだ。

「んあああ……♥ 入ってきました……最後のおチンポ様……♥ こんなに熱くて、こんなに優しくて……♥ あなた様の何百年分の孤独が、私の中に流れ込んできます……♥」

神夜は精霊の背中に腕を回し、ぎゅっと抱きしめながら、自ら腰を動かし始めた。

「私が……動きますから……♥ あなた様は、ただ私の中で気持ちよくなっていただければ……♥ そうして、安らかに、お眠りくださいませ……♥ んっ、んっ、んっ……♥」

ゆっくりと、しかし深く、神夜は腰をうねらせる。膣壁全体で精霊のペニスを扱き、子宮口で亀頭をキスするように締め上げる。それは単なる性行為ではなく、鎮魂の儀式そのものだった。

「あなた様の苦しみ……全部、私の子宮で溶かして差し上げます……♥ あなた様の悲しみ……全部、私の悦びに変えて差し上げます……♥ だからもう、悲しまなくていいのです……♥」

すると。

それまで震えるだけだった精霊が、そっと神夜の頬に手を触れた。

まるで「ありがとう」と言っているかのように。

「……っ……♥」

神夜の目から、一筋の涙がこぼれた。

「感謝感激……極まりないです……♥ あなた様と、こうして出会えて……こうしておチンポ様を寄せ合えて……私は、幸せです……♥ さあ、どうぞ……射精なさってください……♥ 私も、ご一緒にイきますから……♥」

腰の動きを速める。グチュグチュと淫らな音が静かな森に響き渡り、二人を包む。

精霊のペニスがさらに大きく、硬くなり、そして――

ビュルルルルルルルルルルルッ……！

これまでで最も強い射精が、神夜の子宮の奥深くに叩きつけられた。

「んあああああああああっっっっ♥♥♥♥♥」

神夜は絶叫にも似た甘い声を上げ、全身をビクビクと痙攣させた。膣が精霊のペニスを締め付け、一滴残らず精を搾り取る。子宮がそのすべてを受け止め、神夜の胎内は温かい光で満たされた。

「イグッ……イグイグイグイグぅぅぅっっ♥♥♥ ありがとうございますっ、ありがとうございますっ……♥♥♥ おチンポ様っ、おチンポ様ぁぁぁっっっ♥♥♥♥」

絶頂の波が幾重にも押し寄せる中、神夜は確かに見た。

最後の精霊が、それまでのどの精霊よりも強く、美しく輝きながら、ゆっくりと天へ昇っていく姿を。

彼は最後に一度だけ振り返り、神夜に向かって何かを言った。

声は聞こえなかった。しかし神夜には、その言葉がはっきりとわかった。

――ありがとう。

光はやがて星のように瞬き、そして消えた。

六、明け方

気がつくと、森には朝が訪れていた。

夜の間あれほど青白かった空気はすっかり澄み、木々の葉の間からは本物の陽の光が差し込んでいる。小鳥がさえずり、風がさやさやと枝を揺らし、どこからか小川のせせらぎも聞こえてくる。

もう、あの異様な空気はどこにもなかった。

神夜は、苔むした地面の上で目を覚ました。裸のまま、しかし不思議と寒くはなかった。身体中についていた精の痕はきれいに消え、肌はむしろ昨夜よりも輝いているように見える。

「……みなさま、無事に天へ還られたのですね」

神夜はゆっくりと身体を起こし、朝日の中で大きく伸びをした。128cmの爆乳がプルンと揺れ、逞しい乳首が朝の冷気に触れてしこり立つ。パイパンの秘所もすっかり清らかで、昨夜の乱れが嘘のようだった。

「……嬉しいこと極まりないです♥」

彼女は立ち上がり、散らばっていた衣装を手に取る。帯を締め、腰布を巻く。いつものように、乳輪が衣装の端からはみ出ているのを確認し、ふふ、と微笑んだ。

「さて……隣町までは、あと少しでしょうか。今日からまた、新しい出会いがあるかもしれませんね♥」

斬冠刀を背負い直し、神夜は歩き出す。

その足取りは昨夜よりもずっと軽やかで、その顔はどこか神々しい充足感に満ちていた。彼女は何十人もの魂を救ったのである。自らの身体と、悦びと、おチンポ様への限りない敬愛とをもって。

精霊たちはもういない。しかし、この森はもう、悲しみの場所ではない。

楠舞神夜という一人の姫君が、すべてを受け止め、すべてを溶かし、すべてを天へと送ったのだから。

「おチンポ様……人の世も、精霊の世も、あなた様が繋いでくださるのですね。本当に、素晴らしいこと極まりないです……♥」

そう呟いて、神夜は森を後にした。

後にはただ、温かな朝の光と、さわやかな風だけが残された。

――遠くで、誰かの笑い声のような風が吹いた。

（了）